

---

# Rose Mary

水面 幸陽

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

Rose Mary

### 【Nコード】

N5251H

### 【作者名】

水面 幸陽

### 【あらすじ】

一人のアンドロイドに出会った少女、水町時雨はそのアンドロイド水仙が去った後も平穩に暮らしていた。だがある日突然返ってきた水仙は以前のようではなく

## プロローグ（前書き）

コード2112の続編として書いていくつもりです  
つまらないものですが暇なら読んでいってください（笑）

## プロローグ

カチャカチャカチャ……

カチャカチャ…… カッ

「……ふう……」

そこはほとんどが暗闇に包まれた部屋だった。

その中でパソコンの光る液晶と、そのキーボードを軽やかに叩く男の白衣だけが色を帯びる。

男の容姿はズリ落ちそうな眼鏡を高めの鼻で止めているような顔に、背中まで伸びきった黒い髪と白衣はどこかミスマツチだった。

そして彼が見つめる先の画面に表示されるのは『ERROR』の五文字。

「やっぱりそう簡単にはいかないなあ……」

男はボリボリと頭の後ろを搔きながらうなだれる。

と、その時彼の後方から扉を叩く音がした。

「入っていいよ」

「失礼します」

ガチャリ、と年代を思わせるノブを回して入って来たのは長方形のレンズを嵌めた赤いフレームの眼鏡に、臙脂のスーツを上下でピッチリと揃えたまさに秘書と呼ぶべき女性だった。

「明日の会議ですが……ああ、また『ソレ』ですか」

画面に表示された英語の羅列を見て、秘書は眉をひそめた。

『ソレ』

「いいじゃないか。僕の趣味の1つでもあるんだから。所で明日の会議がどうしたって？」

男は腕をわざとらしく広げて話題を強引に変える。

「……………ええ、明日の会議ですが……………」  
秘書は手元の書類を捲りながら説明を始めた。

ドクン

「……………ん？」

男はデスクトップの表示の異常に気づく。

中央に警告の表示が1つ現れる、と同時に二つ、三つと増えていく

「まずった……………ウイルスか……………」

カタカタカタッ

ウイルス撃退用のソフトを立ち上げるが

「そ……………んな馬鹿な……………」

画面は警告で埋まり、もはやPCとして機能しなくなっていた。

「私……………管制室に排除を要請してきます」

「頼む」

話しながらも男はキーボードを叩く指を休めない。

ドクン

「ああ！くそっ……………」

バン、と机を叩く。もはやどんな抵抗も無駄だった。

真っ赤な表示で埋め尽くされた画面を見つめる。

ドクン、ドクン……

そして表示されたのは

『再起動』

刹那、隣の部屋で轟音が鳴り響く。

男は振動で座っていた椅子からズリ落ちる。  
カタン、と眼鏡が落ちる音が響いた。

「やっと……」

男は呆然と、だがしっかりとした口調で

「『彼』が生き返った……」

もう隣の部屋から聞こえていた轟音は遠のいていた。  
誰かが助けを呼んでいる気もするが、彼には聞こえていなかった。  
丸二年かけて彼がしてきた事が実を結んだのだ。  
轟音はもう聞こえない。轟音の元は彼が修理したアンドロイドだった。

直ったのだ。自分が直したのだ。  
そこではっ、と意識が返ってきた。

「逃げ……た？」

## 一話：ハジマリ

梅雨も半ば、7月に入りかけで暑くなってくるある日の朝も水町家は始まる。

「おはよう、時雨！」

「おはようお父さん。」

「おはよー」「はよー」

「はいはい、陽と雪もおはよう」

一足先に起きて全員分の朝ごはんと小学校に入りたての双子の弁当を作るのは父親である瀬矢ではなく、長女の時雨の仕事だった。

家兼レストランで、瀬矢の職場である台所を任されているのは丁度二年前からだった。

「早く食べないと学校待ちあわないよ」

「だいじょーぶ！」「うん！」

時雨は呆れた顔をするも、陽政と雪乃はニコニコと笑いながら箸をすすめる。

瀬矢はと言えば、リビングのある一点を見つめて動かない。

「まだあいつは帰ってこないのか……」

「……うん」

瀬矢の妻、また時雨達の母である夕陽の仏壇の一角に手紙の入った封筒と、2本の箸が置かれていた。

彼がここにいた印、戻ってくるための証。

世界でも開発が進んでいるが実際に表立って披露されることはない

人型アンドロイド。

水仙がここにいたと言う。その証。

「まあそのうち帰ってくるだろ。」

「……うん……」

瀬矢はこの話はこれきりだと言わんばかりに目玉焼きにフォークをつき立てた。

時雨も目を一度だけ閉じて、開ける。それだけでいつもの表情に戻った。

「さあ！急ぐよー！」

水町家は今日もいつもどおりに始まった。

その頃アメリカ

一人の軍服を着た兵士が電話に向かって頭を下げていた

《おい！『彼』はまだ見つからないのか！》

「すみません！大佐。ですがレーダーにも反応しないほど遠くに行かれまして……」

《言い訳はいい！早く『彼』を連れ戻さないと我が国は大変なことになる！》

「は？……と言いますと……」

《日本の兵器を秘密裏に回収していただなんてバレたら日本にどんなものを送り込まれるか……お前も見ただろう。あのアンドロイドは核以上だ。『彼』が本気なら今頃アメリカなんぞ地球から消え去っている》

電話を持つ手が震える。

「どうかしたのか？」

に……日本語……？

カチリ……と音が鳴る。そして背中に何か棒のようなものを押し当てられた感触。

「手を上げ……ああそうか、ここはアメリカだったな。ホールド……アップ？だっけな？」

兵士は直感した。この男こそが『彼』であることを。すぐさま受話器を机の上に置き、手を上げる。

「ふうん……随分と聞き分けがいい……が、まあいい。少し眠ってもらうぞ。」

ドスリ、と背中に重い感触のち、兵士は倒れる。

『彼』奏葉水仙はそのまま電話を取り、

「こんにちわ、大佐」

《なっ……貴様……まさか》

「ああ、俺だ。」

《もう逃げたんじゃなかったのか?!》

「いや、ずっと隠れてたんだがレーダーに引つ掛からないところはよくわからないな。それはともかく、俺は今猛烈に日本に行きたい船を出せ」

《そ……っんな要求……》

「聞こえないか？ いや、聞こえるよな。俺は一瞬でお前のいる場所を特定し、三日以内にお前を殺せるぞ？」

《くっ……その代わり……》

「アメリカなんか戻ってこないさ。俺だって好きでいた訳じゃない。」

《違う！ 私達に捕縛されていたことを誰にも漏らすな！ それが出来のなら五番ドックに行け！ ああ！ さっさと行ってしまえ！》

ガチャンと水仙の返事もまたずに通信は切れる。

五番ドック……

船の見取り図を兵士からさつと抜き取ると歩き出した。

「なんで俺は日本に行きたいと思ったんだらうか……」

彼が目覚めたとき、一番に思ったこと。

それが日本に行く事だった。

「まあ行けばわかる……か」

彼は着実に日本へと近づく。

「時雨ー」

「あ、ともちゃん……おはよー」

「うん、おはよ」

通学路を歩く時雨に後ろから走ってきた女生徒が肩を叩く。  
女生徒の名前は朝居智世<sup>あさいちよ</sup>。肩下まで伸ばした茶色がかったロングの髪と、桜の花びらの髪留め、一昔前のアイドルのような顔立ちで制服はミニスカートをもっとミニにしたような際どい着方をした、平たく言えば一般的な女子高生と言ったような風貌だった。

「いやー、もう高一も二カ月が過ぎちゃったかー……」

「時雨、早いよ！そこ感じるの早いよー」

「あはははー」

「ちよっと！時雨ー」

智世は軽く時雨を小突きながら学校への道を歩き出す。

時雨もそれに続きながら学校へ向かう

他愛もない世間話をしながら徒歩通学の時間を潰した。

そして、学校が丁度後十メートル程と言う所で、

「でぞ、でぞ」

「どーしたの？」

智世が目を輝かせて時雨にしがみつく。

「あの話……ホント？」

「え……？」

智世は言わんでもわかるでしょ、とばかりに

「だーからー、ラブレタークラスの男子全員から貰った、てやつ」  
「ええ?!なんでそんな尾ひれついた噂になってるの?!」

「おっと……ということはラブレターは本当なのですか?ほほう…

…」

「あ……いや、貰ったのはそうだけどそのなんて言うかそんな沢山  
じゃ……」

時雨は学校までの道が急に遠のいた気がした。

なんで知ってるんだろ……

彼女がラブレターを貰ったのは確かだった。

しかも1通ではなく、5通や6通。

それも入学してから一ヶ月もたない頃である。

「で?あつちの噂は?」

「ふえ?あつち?」

「また誤魔化そうとして!。2年の弓野先輩からの……」

「ああっ!チャイムが!」

「えっ?!うそお!」

いいところで予鈴のチャイムが校内から響く。

二人が通う高校 あおはかくえん 青羽学園 では、予鈴が鳴るまでに校内に入

らないと放課後に生徒会に呼び出しをくらうほど、時間には厳しい。

「走るよー!」

「えっ……ちょっと弓野先輩の……」

時雨は智世の返事を待たずに走り出す。

重要な情報を聞き出せなかった智代は、そのことを悔しく思いながらも時雨と一緒に校内に向かって走っていった。

## 二話…ウロキ

「五番ドック……五番ドック……」

軍基地特有の薄暗い廊下でコツコツ、と硬い床に革靴の踵を打つ音が響く。先ほどの兵士から抜き取った内部地図は素人目には分かり難いもので、水仙は迷子になっていた。

「仮にも戦闘用アンドロイドだからこれぐらい読み取る機能があってもいいものなんだが……っと」

独り言で時間を潰している間に『五番ドック』と書かれたプレートを見つける。

日本。

彼が目指すのはそこしかなかった。

何故俺は……

立ち止まった水仙の思考が渦を巻く。

何故自分は日本に行かなければならないのか。何故自分は生きているのか。何故自分は

「……ふう」

思考を止めて、軽くため息をつく。

ドックの中には一台のエンジン付きボートが留まっていた。

「まさか……これで？」

しかし、ドックの中には警備しているはずの兵士もいないし、それどころか軍服を着た人はここに来るまで一人もいなかった。下手に自分に抵抗しないように……とのことだったのだろうが、

「操作方法が」

わからん

「……と言つことで、来週の月曜日も休みになるため学校は3連休となりますが……って人の話は最後まで聞きなさいよ」

自称、熱血女子教師である担任の声は既に遠し、3連休と聞いたクラスの生徒達は早くも休みの予定について騒ぎ出す。

「海！」「おい今6月……」

「山！」「梅雨時の山って事故多いらしいな」

「自宅……」「この二ートが」

とホームルームそっちのけの男子はどんどんヒートアップしていく。

「……もういい……ホームルーム終了……」

覇気を無くした女子教師は帰りの挨拶もしないまま教室から出て行く。  
と同時に静かにしていた女子もグループごとに集まって各々予定を立て始める。

「どこ行く?!」「温水プールとかどうよ?」「男子と被ってんじやん……」

一気に騒々しさが増した教室から一人だけ、逃げ出すように扉から飛び出る。

時雨と智世だった。

「ええ?!何で付いて来るの?」

「今から予定立てるって時にどこ行くのさ」

「い……忙しいの」

正確には巻き込まれる前に逃げようとした時雨を智世が追う形で、パタパタと二人分の上履きの音を鳴らしながら階段を下りる。

智世は自然と早足になる時雨にぴったりとくっ付きながら手を口に当ててホホホ、と笑う。

「3連休、予定も入れずにさっさと帰るところを見るとさては男だな。つとなると……やはり弓野先輩いい」「いや別にそんなんじゃないよ」

昇降口でピタリと足を止めた時雨に智世は驚きながら少し前に足を止め、振り向く。

「え?じゃあ他の人?」

「違う。明日は大事な日なの。」  
「ふーん……」

いつもより元気を無くした時雨に微妙な変化を感じとったのか、そういう所には鈍いはずの智世はあっさり引き下がる。

「……じゃあいいや。私戻るから」

そう言いながら智世はスカートの裾をヒラヒラさせながら階段を上がって行った。

姿が完全に見えなくなった所で時雨はため息をつく。

「ふう……」

嘘は言っていない。

智世がなんとなくでも察してくれたのはわかった時雨だが、微妙にじっくりこなかった。

それでも明日は大事な日なのだ。予定を入れるわけにはいかない。靴を引つ掛けながら、校門に向かう。

今日の夕飯何にしようか……ああ、智世には悪いことしちゃったかな

寂しい帰り道を埋めるように、次々とどうでもいいことを考え出す。梅雨明けも間近の空は水色がただ、広がっていた。



## 二話・ウロキ（後書き）

少し書き方を変えてみました。

注意点、感想などありましたらお願いします。

### 三話：オカエリ

「暇だ」

「会議中ですよ、奏葉教授」

「暇なものは暇なんだよ、アーネちゃん」

「水町、と呼んでくださいと半年前から言っています」

「アー君が所属してからもうそんなに立つのか」

百人もの人が入ってもまだ余裕があるだろうと思われる広い会議室では、五メートルはあろうかという机を中心に向かい合うように椅子が並べられている。

また、扉の反対側の壁にはこれまた一般家庭ではお目にかかれない特大サイズのテレビと部屋の天井から吊るす形になるまた大きいモニター。

それ以外の壁の空いたスペースには高級そうな絵画がずらりと並んでいる。

要するに、ここは相当な立場の者が必要とする会議室のだが、明らかに場違いな空気を醸し出す男が周りに構わず私語を堪能していた。

その男の容姿はズリ落ちそうな眼鏡を高めの鼻で止めているような顔に、背中まで伸びきった黒い髪と白衣。

その横に直立する秘書は長方形のレンズを嵌めた赤いフレームの眼鏡に、臍脂のスーツを上下でピッチリと揃えたまさに秘書。

「あーソウバ君、君はもう出ていい。」

「あ、それじゃあ失礼します」

もはや毎度のこと、の用にテレビ前の社長椅子に座った男が手を振った。

実際、社長のように位が高い男なのだが、奏葉はそれを気にしない。

「んじゃあまた」

「失礼します」

奏葉と水町は揃って会議室を後にした。

ガチャリ、と扉が閉まる音を確認してから、

「くつくつくつ……」

「何が可笑しいのですか？」

奏葉はこらえ切れなかった笑いを押し殺しながら歩き出した。

「いや……なんでもないよ、それより早く研究室に戻るっ」

「はい」

廊下の所々に先日の『脱走』の後が残っていた。

それは大体的にアメリカに情報が流れることはなかったが、研究所の一棟が全壊、二棟が半壊と言う悲惨な結果を残した。

全壊した一棟は『脱走機』を研究所ごと爆破するためだったので致し方ないものの、二棟は純粹に『脱走機』と警備兵の交戦中に破壊されたものだった。

「僕の研究室に誰もいれてないよね？」

「日本人の研究室に近づこうとする研究者は一人もいませんから。特に奏葉教授の部屋となると。」

「厳しいね」

廊下を歩きながらニヤニヤと笑う男は怪しすぎるが、伸ばした黒髪に白衣の日本人は研究施設の中でも有名だったので、すれ違う人は

みんな無視をしていた。

「じゃあ『アレ』も残ってるね？」

「無論です」

またくつくつと奏葉は笑う。

「うん、それなら問題ないよ」

「出かける準備は出来た？」

「出来たぞ」

「できたー」「きたー」

その日水町家の家長、瀬矢が店長を務める小さいながらも収入源のレストラン『ローズ・マリー』は三日間の休業の張り紙を扉に貼り付けていた。

そして、四人は瀬矢の運転するシルバーのワゴンに乗って朝六時に家を出た。

「……………」

運転して十分と経たないうちに、双子は夢の世界へと旅立った。朝五時に起きて行動するのは小学一年生にはまだ早いようだった。

一方、時雨は完全な夜型で朝には弱いはずなのだが、今日ばかりは寝ぼけた様子は見当たらない。

「なんかあつたか？」

瀬矢は煙草を啜えて、規定速度四十キロきつちりで市内を走っている。

車の少ない車道に煙草を吐き出して、

「……チビ共が静かにしているんだ、少しぐらい話したって「煙草。」

瀬矢は、へ？と言った顔で時雨を見た。

「煙草、いくら火が消えてるからって捨てちゃダメ。」

「え？あ、ああ……悪い」

助手席の時雨はしゃべりながらも窓から目を放さない。  
通り過ぎていく街路樹や早起きの老人、灯りの点いていない街灯を  
目の端に流す。

「ともちゃんにね……」

「ともちゃん？」

えーっとああ、この前うちに来た……

「あの子が」

「うん。」

「その子がどうかしたのか？」

時雨が暗い顔をしているのは大体よくない事のあった時なのだが、  
瀬矢はその時に限って話を聞きたがる。

「可哀想な子、って思われたかも」  
「は？」

瀬矢はわけがわからない、って顔をしたが時雨は気づかずに

「三連休に遊ぶ友達もいないって思われたかもしれない」

ああ、そういうことが

「なんだ、時雨は予定があることをちゃんと言わなかったのか」

「だって……言えるわけ……」

「じゃあ週が空けたら言うんだな。それで大丈夫だろ」

「あ……うう」

時雨は渋々、と言った感じで頷いた。

その後も多少影がかかっていたものの、いつも通りの表情に戻った  
時雨を見て、瀬矢はほっと息をついた。

そして、それから他愛もない会話を続けながら県の境にある寺まで  
やってくる。

「お久しぶりです」  
「どうも」

車を駐車場に止めて、双子を時雨が起こしている間に瀬矢は一足早  
く寺に隣接した墓地まで来ていた。

見える人影はなく、一人だけ瀬矢の前に立っている女性と瀬矢だけ  
が墓地にいた。

「子供達は？」

「元気いっぱいです。強いて言うなら長女が大変な年頃ですかね。」

「それは結構」

女性と瀬矢は笑うこともなく少ない言葉だけを交わした。

二人が立つのは『水町夕陽』と書かれた墓石の前。

「お父さん」

ふと後ろを振り向くと双子を両脇に引きずりながら時雨が駆け寄ってくる所だった。

「それじゃあ私はこれで」

「ではまた来年」

時雨が来る前に女性は逆方向へと歩き出した。

瀬矢はそこで煙草を取り出し、火を点ける。

「はあ……はあ……」

「ご苦労さん」

ふー、と煙草の煙を吐き出しながら時雨のほうを向く。  
毎年の行事。

夕陽の墓参りはこれで六回目だった。

「じゃあ始めようか」

「うん。」

双子は寝ぼけ眼を擦りながら、四本の手を突き出す。

その手に束ねた線香を瀬矢が渡しながら、

「いつもの通りだからな」

「うん」「はい」

と、瀬矢の出すマッチの火で火をつけて、墓石の前の皿に置く。

そして、手を合わせて目をしっかりと閉じ、そのまま十秒ぐらいしてから

「終わったよ」「終わった。」

陽政と雪乃は下がって、瀬矢にしがみ付く。

「じゃあ後は頼んだ」

そのまま時雨だけを残して瀬矢は双子を連れて駐車場へと歩き出す。

毎年、瀬矢は時雨だけを残して先に行っていた。

時雨がそこで何をするかをわかっているかのように。

「お母さん……」

一年間、どこでも涙を流さない時雨は

一年に一度ここでだけ涙を流す。

ポツリ、ポツリと俯く顔の影から涙が流れ出す。

その時だった。

「何故泣いている？」

え？と涙を拭くのも忘れて時雨は振り返った。  
二年前、聞かなくなった声とその声は似ていた。  
見て、確認して、それで時雨は驚くこともなかった。

「君の名前は？」

時雨はあえて、この言葉を選ぶ。

「コード2112。」

ちよっとぶざけたように、水仙はそう言った。

「ただいま 時雨」

「おかえり水仙」

車に戻ったら双子がびっくりするだろう、と思いながら。

時雨は水仙に飛びついた。



### 三話・オカエリ（後書き）

最終話、っぽいですが……全然終わりません（汗

これから貯めておいたネタとか全部入れていくのでこれからを期待してください。

では

## 四話：タダイマ

双子と瀬矢の反応はほぼ予想通りだった。

多少、驚いていたようだが瀬矢のほうはそれよりも……と言った視線を水仙に向けていた。正しくはその右手、時雨の左手との繋がりだった。

抱きつくなり顔を真っ赤にして文句を長々を続ける時雨に戸惑った水仙は、とりあえず宥めるために時雨の手を掴んだのだが、それをどう解釈したのかその手を握ったままその手を引いて駐車場まで戻ってきた。

水仙は些か戸惑うものの、もう2度と離さないと言わんばかりの力でしっかりと握られていたので払うことも出来ず、別に悪い気はしなかったのもそのまま瀬矢の前に戻ったのだが。

「何だ坊主。家出はもう終わりか？」

「ご心配おかけしましてどうも申し訳ございませんでしたという所存です」

「何語だそりゃあ？」

若干の急展開に水仙はやたらと長い敬語を並べる。

自分は戻ってきててもよかったのか。その疑問ばかりが渦巻いていた頭の中で、『家出』という単語は奇妙に響いた。

どうしたらいいか拘束されていない逆側の手で頭を搔くが状況が状況。時雨は手を繋いだときから俯いたまま一言も発していない。

どうしたものが……

そもそも何故自分がこんなに簡単に時雨と再会できたのかも疑問だし、何かもつと重要なことが抜けてるようで仕方がない。

自分の記憶は戦争、それからその収束。気がついたら墓地の入り口に立っていて、時雨の姿が見えた。

人口脳が戦争で故障なり不具合なりを起こしたのかという可能性も思考するが、だったらそもそも戦争以前の記憶はまっさらになっ  
ているはずだった。

それに、戦争時の記憶もそれほど鮮明ではない。

「えっと……あの……」

「みずきおにーちゃんだー！」「みずきー！」

「グフツ……」

微妙な空気にとりあえず何か話そうとした水仙に正面から陽政と雪  
乃は頭から水仙の鳩尾に突っ込んだ。

当然水仙はその勢いで時雨と繋いでいた手を離してしまい、しかし  
一瞬ビキリと体を震わせた彼女に気づくこともなく地面にうずくま  
る。

「あれー？どうしたの？」「うれし泣きだー！」

うずくまって、痛みもあつたがその衝撃で抑えていたよくわからな  
い感情が表に出てきた。それはもう簡単に。

涙なんて。感情なんて。痛みなんて。

全部が自分にあるような気がしてもうその奔流はすべてが涙となっ  
てあふれ出した。

砂利を敷き詰めたような、それでいて硬くもない地面にポツポツと  
染みを作っていく。

その背中に時雨の手が添えられて。

水仙は今、自分がアンドロイドだとか記憶がどうだとか、感情とか  
肉体とか全てがどうでもよくなって、背中に感じる小さなぬくもり  
で自分を実感した。

「あ、ありが……とう……」

多少つつかえながらも、それが一番だと感じていたから。感じる事ができたから。

「……おかえり」

「おかえり」

「おかえりー」「おかえりー！」

その日学んだ新たな感情。

それこそが、『感情』だった。

それから車に乗って水町家へ帰るまで1時間。

瀬矢も、時雨も、陽政も、雪乃も、そして水仙。皆一緒に。

新しい生活に。

新しい日常に。

カタカタ……とキーボードを叩き続ける音。  
コツコツ……と革靴で部屋を歩き回る音。

「ねえねえ、アーネちゃん」

「……」

「アーネちゃん」



唐突に奏葉は人差し指をピン、と立てた。

「人間の脳は巨大なハードディスクなんだよ」

その人差し指をこめかみに当て、ニヒルに笑いながら、

「僕は今まで研究したデータの全てを記憶している。」

と何事でもないかのように言い放った。

その異様さに水町は一瞬魅かれるが、それはあくまで一瞬。

「はあ、それは凄いですね。」

「信じてない顔だね……」

「いつも通りですが？」

「君はいつも僕を信用してないの?!」

「今更です」

「え?!それいつから?」

またしても忙しくキーボードを打ち始めた水町に奏葉が構ってもらえるはずもなく。

ちよっとしたシリASMードはすぐに崩壊し、いつもの光景が戻ってくる。

「んーまあもう少し様子をみようかな。それまでせいぜい楽しむんだね。水仙」

「誰に向かって話しているんですか」

「今のはそっとしておくところだよ?!」



## 五話・アンテン(前書き)

どうも遅くなりました。水面です^^;

もっと早くしようと思ってたんですが思うように時間がとれず。

毎回2000〜2500文字程度の更新を目安にしています。

それとこれはかなり長くなりそうです(汗

では本編

## 五話：アンテン

トントン……と水町家の台所で包丁を使う規則正しい音が転がる。  
朝六時四十分。

起きるには丁度いい時間なのだが、水仙以外誰も起きていなかった。

この家族と来たら……

そんなことを考えているうちに包丁が大根を滑って指に掠る。

「おっと……」

人差し指の間接から血が流れるが気にしない。

アンドロイドである自分の体はすぐにそんな傷は修復できるようになっている。

血のついたまな板を水で流すと、ドタドタと階段を下りてくる足音。

「う……おはようございます」

「またパンツ見えてんぞ、時雨」

「え?! 嘘!」

「部屋に戻って布団の中漁って来い」

「う……うあー!」

起きたばかりなのに騒がしい奴だな、と水仙が思つのも束の間。今の騒ぎで起きてきた水町家の残りのメンバーがぞろぞろと和室から出てきた。

「水仙、飯……」

「めしー」「めしー」

「ああ……もうつつさい! ちょっとぐらい待て!」

切った大根を鍋に放り込み、ふと気づく。

人差し指の怪我が治ってないことに。

アンドロイドである自分の特性上、傷ついた部位は程度にもよるが大体が秒単位で修復される。

「うーん? なんか痛いけど……まあ放っておけば治るか。」

そんな見切りでまた今度は五人分の目玉焼きを焼く作業に入る。

概ね。

水仙が帰ってきてからの一週間はこんな感じで過ごしていた。

そして概ね、一家は平和だった。

「そんなじゃあ行つて来ます！」

「いつてきます」「きまーす！」

時雨が時間ギリギリで玄関を飛び出し、続くようにして双子も続いていった。

残ったのは瀬矢と水仙。

二人はレストランの厨房に移動し、10時からの開店に備える。

「水仙、その人参と大根。千切りで茹でとけ」

「はい」

「あ、それと鍋。一番でかいの洗って水張つとけ」

「はいはい」

「水仙！昨日仕入れたアレは?!」

「知るか」

淡々と瀬矢の受け答えもしながら水仙は作業をこなしていく。

最初の二日で要領を掴んだ水仙はいまや、一日のほとんどを厨房で

瀬矢の手伝いで占めていた。

そして全ての下ごしらえが済んだ9時30分。

水仙と瀬矢は居住区に戻って休憩しながらTVゲームに興じていた。

「おいクソガキ。ちょっとは手加減つてものを」

「無理。」

「つてかお前空中コンボなんて時雨でも出来ないぞ?!」

「なんか指先が慣れてる感じがするんだよ。なんとなくだ。」

「お前……実は開発の時に変なプログラミングとかされたんじゃない……」

「上下BB……下A上右下B……これで10勝。」

「ああっ！最初は勝っていたのに！」

攻略本にも載っていない様な鬼畜コンボを瀬矢の使うキャラに叩き込んだ水仙はコントローラーを放り投げた。

瀬矢はまだやり足りないようだが、完全無視で腰を上げる。

(変な……プログラミング?)

と、そこで瀬矢の言葉に引っ掛かるようなものを感じた水仙は壁を向いて不貞腐れ気味の瀬矢のほうを向いて、

「瀬矢、なんで俺の人格ソフトがプログラミング方式だと知っているんだ？普通の一般向けされた……軍事目的じゃないアンドロイドには基本人格ソフトが使われていてプログラミングなんてしない。そんな事を知っているのは開発者関連か開発者本人しか知らないはずなんだが」

「んあ？ああ、俺の親父が軍事アンドロイドの開発者だったんだよ。で、器用さが俺に遺伝。でも兵器なんか作るガラじゃなかったからレストランやってんだよ」

「親父……？研究所に水町、なんて男はいなかったはずだが？」

「あーまあなんだ、気にすんな。あ！そうだ、親父に結構色々教わったからアンドロイドのメンテぐらいは出来るぞ？軍用と家庭用じゃあ若干違っただろうが調子悪くなったら言え」

「なんかはぐらかされた気がしないでもないが……その時はよろしく頼む」

そこまで言うてから水仙はさっきの傷が治らないことについて思い出した。

大した欠陥じゃないだろうが気になるものは気になる。現に今も傷は治っていない。

「あ、そうだ。ちよつと気になることがあって……」

「おつともう10時前じゃねーか。シャッター開けに行くぞ」

だらだらごろごろしていた瀬矢はシャキ、と立ち上がって廊下を駆けて行った。

水仙も散らかったゲーム機をテレビの下に押し込み、廊下に出る。

(まあ……夜でもいいか……)

表でガラガラ……とシャッターを開ける音と、早くも来た客の接待をしている瀬矢の声が聞こえる。

「軍用……か」

瀬矢に言われた言葉。

『軍用アンドロイド』

今、水仙の枷となっているのはそれだった。

水仙には軍用、と呼ばれてもしっくりこない気がしていた。

右手を軽く振ってみるが、手首に仕込まれているはずの刃は出てこないし、踵を床に打ち付けても膝に収納された50?の弾丸が射出されることもない。

「不思議だ……」

まるで人間になってしまったかのように全ての機能が失われてしまっている。

兵器も、再生能力も、体力も、人工の強化筋肉も。等身大の人間のようになってしまうている。

今、海外と日本は水仙のことを探しているだろう。

そして、いつか見つかったとき。自分は逃げ切れるのか、守りきれ  
るのか。それとも

「水仙！早く来い！」

ドアを開けて玄関から瀬矢が水仙に向かって叫んでいた。  
はっ、と顔を上げて水仙は思考を振り払うようにして頭を左右に振  
った。

今はそんなことを考えるときじゃない。

今が幸せだから。

平和で、時雨がいて、瀬矢がいて、双子がいて。

「ああ、うるさいな」

人間のように接してくれて。  
平和で。

「早くし……」

ドスリ、と。

瀬矢はドアに手をかけたまま。  
倒れた。

驚く間もなく水仙の右足の太股、それと左肩にも何かがぶつかった  
ような感触と共に熱い感覚が突き抜ける。

反動で仰向けに倒れていく視界に入ったのは。

黒光りする金属。

それを構えた白衣の人間。

そして傍らの、

「しぐ……れ……」

暗転

「ごめんね」

時雨がそう呟いた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5251h/>

---

Rose Mary

2010年10月28日08時50分発行